

あとがき

この本は東日本震災から10年目の2021年3月に出る予定でしたが、私のわがままで5か月遅れました。まずその経緯からお話したいと思います。

私が福島の状態を直に目にする機会を得て強く思ったのが、この件は医学の歴史に残るものであり、専門家としては後世のためにしっかりと記録を残す義務がある、ということでした。チェルノブイリの時も過剰診断が起きていたのは確実なのですが、その実態がどうであったか、という点に関しては関係者から情報が出てこないため全くわかりませんでした。このことが福島での過剰診断の被害の拡大につながってしまったのです。

しかし、検査の当事者が実情を語るということは非常に勇気がいることです。本書では第5章がそれに相当します。この章が無ければ本書はその存在の意味がない、と言ってもいいくらいの重要な部分ですが、実は最初は存在しなかったのです。

緑川先生と大津留先生は福島の甲状腺検査の現場のことを熟知され、かつ正直に語っていただけの唯一の専門家です。両先生は、検査のことを思い出すのもトラウマでありそれを文書に残すのは負担が大きい、とまでおっしゃっていましたし、まだ検査を担当されている頃、修行僧のような面持ちで検査のことを語っておられた姿も拝見しておりましたので、そもそも最初の段階で本書の執筆をよくぞ引き受けていただけたものだと思います。

最初の原稿が完成した時に、そこをさらに私がお願いして、無理に無理を重ねて新たな章を今回の内容まで踏み込んで書いていただいたのです。本当に身を削るような思いをされたのではないかと、今更ながら申し訳なく思います。

本書の第4章、第5章の2つの章は福島で起きたことを記録した貴重な一次資料として、今後の問題の解決のための重要な情報源となります。福島がチェルノブイリとは違ったコースを歩むための第一歩になるに違いありません。ですから読者の皆様にも、両先生方がどのような思いでこの文章を書かれたか、という点まで思いをいたしてお読みいただきたいのです。

医療者の方々、とくに医学系の学生さんたちは自分たちが先生方と同じ立場であったらどう行動したであろうか、ということを考えながら読んでみてください。震災直後から福島の子どものための検査の最前線に立ち、いちばん子どもたちのことを考えてこられた先生方が、なぜ検査の現場から去らなければならなかったのか。そこに日本の医療界が抱える深刻な問題を垣間見ることができます。

専門家であること以前に、一人の医療者として、一人の人間として、検査や治療の対象とどう向き合うべきなのか。通常の医学教育では教えきれない学びがこのパートを読むことで得られるでしょう。この本はぜひ、医学系教育機関の教科書としても使っていただきたいと思っています。

第6章を担当していただいた菊池誠先生は、福島の甲状腺検査の問題について、「自分は専門家じゃないんだけど」とおっしゃりつつ、折に触れて発言されてきました。この点については、専門家の一人として私は非常に申し訳なく思っています。専門家がきちんとしたことを言わないからこそ、専門外の菊池先生がそれを代弁しないとイケない状況になっていたわけですから。また、菊池先生は「自分が福島の甲状腺検査の問題について一番最初に指摘した」とおっしゃっています。でも、それに気が付いていた専門家は、おおやけに言わなかったというだけで多数いたのです。

2011年に福島の子どもたちは重大な被曝を免れたようだ、という情報が流れたのにその翌年に甲状腺がんの子どもがたくさん見つかったら、誰でも子どもたちに悪いことが起こってるんじゃないか、と疑います。菊池先生の文章は福島の子どもたちに対する愛と憂慮にあふれています。なぜ誰も問題を指摘しないんだ、というもどかしさと、そうこうしているうちに日々甲状腺がんが診断される子どもたちがずるずると増えていく理不尽さをずっと感じておられたのだということが、この章を読むとよくわかります。

第7章を担当していただいた児玉一八先生を私が初めて知ったのは、福島の甲状腺がんが問題になりだした頃に、私の論文を解説している「一般人」がいるらしい、という噂を聞いた時です。「一般人」というのは失礼かもしれませんが、おそらく福島の問題が明らかになるまでは甲状腺の病気の勉強はされていなかったのではないかと思います。

自分で言うのもおかしいですが、私の論文(もちろん英語です)は「ウルトラ理系」の頭がないと理解が難しいものが多く、実際、医学系の学会で講演するといつもとんちんかんな質問がくるので閉口していたのです。「大丈夫かな？」と心配になったのですが、その解説を見てみるとこれが素晴らしい。一点の誤りもなく核心を捉えているのです。「ほおっ、こうして説明したらわかってもらえるのか」と以後の学生指導では遠慮なく使わせてもらいました。

今回の解説も簡潔・明瞭であり、この道30年の私と意見が食い違ったのは1点だけ、それも論文の最新のアップデートの所のみ、という快挙です。いい意味で普通じゃありません。おそらく物事の本質を捉えることを知っておられるのでしょう。こういう方は過剰診断の意味を早々に理解された方々の中には結構おられるように思います。

私の担当した第1～3章ですが、従来の本にあるような、「こんな可能性もあるよ、あんな可能性もあるよ」という書き方はやめました。例えば、「若年者の甲状腺がんの早期診断は有害」とか「甲状腺がんは悪性化しない」とかいう話は、外国ではともかく国内の学会で出したら相当な反発を受けるでしょう。しかしこと福島の甲状腺検査に関する限り、専門家たちが科学的な確からしさよりも自分たちの立ち位置を優先したポジショントークを繰り返したことが混乱を招いてしまったのです。これらの章では、現時点で最も確からしい解釈しか書いてありません。

そして、年月がたって明らかになってくる事実は必ず本書に書いてある通りの様相を呈してくるであろうと断言しておきます。逆に言うと、そのような自信がないことは書いておりません。そして、福島の子どもたちに起こっているのは間違いなく過剰診断であり、それ以外である可能性はありません。

最後に、社長になりたてのたいへんな時期に本書の企画を立ち上げていただいたあけび書房の岡林信一さんに感謝を申し上げたいと思います。そもそも過剰診断の問題にかかわるとろくなことがありません。誰からも(被害者からさえもです)感謝されないし、多くの人たちから邪魔者扱いされ、誤解されて非難を受ける、というのがお決まりのコースです。そんな中で、火中の栗を拾ってくれる岡林さんのような方が一人、また一人と現れてやっと本書が発刊できる環境が整ったのです。

第5章で出てきた福島の子どもたちの話を思い出してください。私が聞いた話では、子どもたちは甲状腺検査は自分たちに害があると知った後でも、それでも検査を受ける、と言うそうです。その理由は、お父さん・お母さんが喜ぶから、自分たちがデータを出すことで自分たちの故郷である福島が大丈夫なんだって証明できるから、です。なんとけなげなことでしょう。こんな状態に子どもたちを置いておいていいんでしょうか。要するにおとながみんな悪いんです。

この「おとな」の中にはこの検査が今日のような災厄をもたらすこと予想していながら、しばらく高みの見物をしていた私も含まれます。自分への反省も込めて、あとがきとさせていただきます。本書がおとなたちが目を覚まして、「子どもたちを守る」という本来やるべき行動を起こすきっかけになることを願っています。